

## 着任の御挨拶

## 私の「原点」に戻って

西田 充

9月1日に着任しました。長崎は、地元福岡の小学校の修学旅行で訪れて、核兵器廃絶に関わる仕事をしたいと思った最初のきっかけの土地です。修学旅行のバスの中でガイドさんが歌ってくれた「原爆を許すまじ」という歌がずっと学生時代も今に至るまでも頭に残っています。学生時代には、なぜ日本は思い切って核の傘から出られないのか、という素朴な疑問を持ち、批判的な気持ちを持っていましたが、その背景をきちんと理解したいと思い、外務省に入りました。外務省では、25年間、そのほとんどの時期を核軍縮不拡散の分野で働いてきました。外務省の仕事は安全保障を基礎とすることを学びましたが、その中でも常に長崎で感じた気持ちを心の中で持ち続け、安全保障の枠組みの中でも1ミリでも核のない世界に近づけるよう努力してきました。自分にどれだけのことができたのかわかりませんが、できる限りの努力はしてきたつもりです。

核兵器廃絶研究センター(RECNA)は、ご縁があって、その設立の頃から関わらせていただいております。RECNAが正式に発足してからも、客員という形で定期的に講義や講演の形で長崎を訪れておりました。その際、可能な限り、原爆資料館にも足を運んだり、平和式典に参列したりして、初心を忘れないよう原点を振り返っておりました。長崎とは、ジュネーブの軍縮会議日本政府代表部に赴任していた頃にもご縁がありました。毎年、夏に、高校生平和大使をお迎えするのは1年の中でも最も楽しみなことの一つでした。高校生の真っすぐな気持ちを伺うことで、自分の心の中を浄化するような感じでした。その時のお一人であった林田さんと巡り巡ってRECNAで同僚となったのもご縁です。



このように、長崎やRECNAとは様々なご縁があり、今回、自分の原点に戻ってきたという感じで身が引き締まる思いをしております。改めて自分にとっては天職だったのだなと実感しています。外務省で学んだことや経験も糧にしなが、少しでも核のない世界の実現に貢献したいと思います。

(にしだ みちる、RECNA教授)

## 被爆の実相の伝承へ向けて 「被爆者と出会う」 デジタル教材

林田 光弘

RECNAと国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館は、被爆前の長崎の街並みや人々の暮らしがわかる写真の募集している。呼びかけは7月末に開始し、年内までを集中募集期間としている。この取り組みは、今年4月に両組織がはじめた「被爆の実相の伝承」のオンライン化・デジタル化事業の一環として行われているもので、集まった写真はデジタル化し、オンライン教材などに活用する。

\* RECNA Webサイトでの呼びかけは [こちら](#)

呼びかけから1ヶ月、早速複数の方から写真を提供いただいている。そのなかでも、駅のホームで撮影された1枚は戦前の浦上駅を写した可能性が高く、確証が得られれば被爆前の浦上を伝える非常に貴重な資料となる。

戦後76年、私たちは被爆者の高齢化にともない、被爆者なき時代にどのように被爆体験を伝えるのかという課題に直面している。戦争を知らない世代にとって、広島・長崎の出来事は、想像を絶するほどの被害であるが故に、自分ごととして受

け止めるのは難しい。原爆の悲惨さを伝える焼け野が原の写真は、そこに存在した人々の営みを想像するから心を動かすのであり、そもそも当時どんな生活があったのかもよく知らない世代にとって、それは誰しもができることではない。焼け野が原となった場所には、街があり、人々の日常があったことを伝えるためにも、被爆前との連続性を意識した伝え方の工夫が必要なのである。今回集める写真は、時代を経ても変わらない日常を感じさせるための重要な補助線の役割を担う。

また、多様な社会に生きる私たちにとって、それぞれの日常が異なることを考えれば、76年前にも様々な日常があったことを記録として残すことが重要であるのは言うまでもない。コロナ禍で家庭内の断捨離が進むなか、多様な日常風景を後世に伝える貴重な資料が捨てられないように、写真募集の呼びかけを広げていきたい。

浦上で生まれ育った私は、中学3年生の時に「高校生一人署名活動」に加わって以来、これまで10年以上にわたり核兵器廃絶を目指す市民活動に身をおいてきた。被爆体験とは「あの日」に限定された体験ではなく、「被爆者の人生そのもの」であるという視点は自分が活動を通じて被爆者のみなさんから学び、最も大切にしてきたことでもある。私にとって、被爆者が、概念ではなく名のある個人であるように、後世の人々が



今回のデジタル化された証言アーカイブを通じて「被爆者と出会った」感覚が得られるような教材づくりに励みたい。

(はやしだ みつひろ、RECNA特任研究員)

## 継承と政策の間で

## RECNA「核遺産・核政策研究会」

山口 響

RECNAでは2020年度、「核遺産・核政策研究会」を立ち上げた。

本研究会の前身であり2017年度に発足した「長崎被爆・戦後史研究会」は、2020年2月に開催されたシンポジウム「私たちは何を継承すべきか——長崎の被爆・戦後史研究から見えてくるもの」の記録まとめをもって、その活動を閉じた(記録は [こちら](#) から入手できる。また、[こちら](#) の記事も参照)。

「長崎被爆・戦後史研究会」では、長崎の被爆者の活動や、原爆・被爆を記録・記憶にとどめその継承を図ろうとする取り組みに焦点を当てて、研究を続けてきた。しかし、研究を続ける中で、そのような社会内部での取り組みが、核兵器をめぐる諸政府の政策にどのような影響を与えているのだろうか、より突っ込んでいうならば、「核兵器なき世界」を指向する諸政策の形成に寄与しているのだろうかという問いが当然にも浮上することになった。

そこで、上記のシンポジウムにおいて、同研究会を発展的に解消し、「核遺産・核政策研究会」をあらたに立ち上げることを提案し、2020年度から研究に移ることになった。これまでに研

究してきた、核兵器の開発・生産・実験・使用などがもたらしたさまざまな有形・無形の痕跡・影響を「核遺産」(核のレガシー)と定義し、その核遺産が核政策(核兵器の開発・生産・実験・使用などに関わって政府が立案・決定する政策や法律など)とどのように相互作用をしているのかを検討する、というのがその眼目である。

2021年3月2日には、ひとつの中間報告としてオンラインにて公開ワークショップを実施した。4本の報告はそれぞれ、「核兵器に対する日米世論と核政策」(高橋博子・奈良大学教授)、「広島・長崎とイギリス帝国戦争博物館の展示と核政策」(広瀬訓・RECNA教授)、「1957年原爆医療法の成立と日米の核・原子力政策」(山口)、「マンハッタン計画国立公園化と日米の対応」(鈴木達治郎・RECNA教授)である。

研究会としては現在、「核のレガシー」と「核政策」の相互作用がより見えやすい具体的事例の絞り込みに向けて、さらなる検討を続けている段階である。

(やまぐち ひびき、RECNA客員研究員)

現在、核戦争(核爆発を攻撃目的で使用した戦争、以下「核使用」)のリスクは、冷戦終了以降最も高くなっていると言われている。特に、北東アジアには核戦争の引き金となるような対立が存在しており、懸念は高まっている。韓国と日本はともに米国による「拡大核抑止」に大きく依存している。しかし、そのような「核抑止」が失敗に終わるリスクについても十分に検討しておく必要がある。そこで、私たちは核兵器が使用されるリスクを十分に理解し、そのリスクを削減する政策を提言するため、「北東アジアにおける核使用リスクの削減」プロジェクトを立ち上げることにした。その目的は、核兵器使用のリスクをより深く理解することにより、この地域において二度と核兵器が使われないようにすることにある。そのためには以下のような質問に答えることが必要である。1)どのような条件下で核兵器は使われるのか(意図的、偶発的にかかわらず)? そのような核兵器使用がより大規模な核戦争に拡大していく過程はどのようなものか? 2)核兵器が使用されたらどのような影響(死傷者、インフラの破壊、環境汚染、気候変動など)がでるか? 3)地域におけるそのような核兵器使用のリスクを最小化するための施策はどのようなものがあるか? これらの研究成果に基づき、最終的には地域での核使用リスク削減のための政策提言を行う。このプロジェクトは、長崎大学「プラネタリー・ヘルス」プログラムの一環として実施される。

本プロジェクトは上記目的を達成すべく、3年間で次の3つのタスクを実施する。

1)核抑止失敗事例の作成(タスク1): 1年目のタスクは、核抑止が機能せず、地域において核兵器が使用されてしまう事例を作成することである。おもに朝鮮半島の危機に焦点を

当て、地域や世界の地政学、安全保障環境を考慮に入れて作成する。今年(2021年)10月8～9日に、第4回「北東アジアの平和と安全保障に関するパネル(PSNA)」ワークショップ(オンライン)を開催し、このプロジェクトの中間報告を行う予定である。

2)核兵器使用の影響評価(シミュレーション・モデルの作成)(タスク2): 2年目は、1年目で作成された核兵器使用事例に基づき、その影響評価をシミュレーション・モデルによって定量的評価を行う。タスク2は、死傷者の数、インフラの破壊・損害、環境汚染、気候変動といった多様な影響を評価する。影響評価の一部(例えば気候変動)は3年目にまたがる可能性もある。

3)核使用リスク低減にむけての政策提言(タスク3): 3年目は、1年目と2年目の成果を踏まえ、地域における核政策を再評価し、核戦争のリスクを最小化するような政策を提言する。

本プロジェクトはRECNA、ノーチラス研究所、アジア太平洋核不拡散・軍縮リーダーシップネットワーク(APLN)が主体となり、PSNAの協力のもと、このプロジェクトを運営する。RECNA/ノーチラス研究所/APLNが「運営委員会」を立ち上げて、プロジェクト全体の運営を担当する。

プロジェクトの成果として、毎年度の終わりに各タスクの報告書や中間報告を発表する。さらに、プロジェクトの課題に応じて、毎年度専門家によるワーキングペーパーを発表する。ワーキングペーパー並びにプロジェクト報告書はJ-PANDIに掲載の予定である。

(すずき たつじろう、RECNA副センター長・教授)

## 新しい時代へ向けての決意

## 令和3年長崎平和宣言

広瀬 訓

今年の平和宣言は、昨年度に続き、冒頭に被爆者の言葉を引用し、始まっている。今年(2021年)は今年(2021年)の4月に亡くなられた小崎登明氏の書かれた、文字通り「叫び」というべき文章である。直接原爆の惨禍を描くというより、「核兵器のない世界」を求める強い意志を表すものであり、それによって核兵器の恐ろしさがひしひしと伝わってくる出だしとなっている。

そして例年にも増して強く核兵器廃絶を訴える内容となっている。その背景には、三つの大きな状況の変化がある。一つは言うまでもなく核兵器禁止条約の発効である。核兵器禁止条約という具体的に「核兵器のない世界」を実現するための国際法が成立したことにより、核兵器廃絶へ向けての具体的なゴールを示し、日本を含む各国の指導者に明確な行動を訴

えることができるようになった。

また、コロナウィルスの感染拡大という世界的な危機の中で、私たちの平穏な日常というものが実は脆いものであり、一度グローバルな問題が発生すれば、誰も無関係ではいられないという現実をあらためて確認せざるを得ない状況が発生したことも盛り込まれている。核兵器の問題はコロナウィルスの問題よりも深刻であり、もし核戦争が勃発したならば、無関係でいられる市民はいないだろう。文字通り人類が絶滅するかもしれないのである。そのような危機と隣り合わせで送っている生活が安全なものだとは決して言えない。コロナパンデミックはそのことをリアルに考える契機ととらえるべきなのである。

そして目前に迫っているのが「被爆者なき時代」の到来であ





核兵器禁止条約発効を告げる長崎市役所前の看板  
(撮影 RECNA)

る。自分の体験として原爆の悲惨さを語れる方は、当然のことながら高齢化し、減少の一途をたどっている。その中で長崎が「最後の戦争被爆地」としてその役割を果たし続けていくために何をすべきなのか、次の世代が真剣に取り組まなければならない。

コロナパンデミックという、「人類共通の脅威」を経験した世代が、核兵器禁止条約という重要な足掛かりを得て、原爆の恐ろしさを体験した人々がその恐ろしさを語ることができない社会においても、その核兵器廃絶へ懸ける思いを受け継ぎ、核兵器廃絶へ向けて新しい一歩を踏み出さなければならないという強い思いを感じさせる今年の長崎平和宣言である。

\* 令和3年の長崎平和宣言は [こちら](#)

(ひろせ さとし、RECNA副センター長・教授)

## 中満さん、安田さんがユースと懇談

吉田 文彦

毎年、8月9日とその直前には大勢の市民だけでなく、要人、著名人が長崎を訪れてくれる。核兵器廃絶研究センター(RECNA)を訪ねてくださる方もいるし、別の場所で意見交換させてもらう機会も少なくない。被爆の日には平和と核廃絶への願いや決意を新たにすると同時に、人と人をつなぐ場と時間を提供してくれる貴重な日でもある。

今年は国連事務次長(軍縮担当上級代表)の中満泉さんと、フォトジャーナリストの安田菜津紀さんを8月8日にRECNAへお招きして、ナガサキ・ユース代表団(NYD)9期生と懇談していただいた。中満さんは長崎平和祈念式典で、グテレス国連事務総長の代理であいさつを代読するために長崎を訪問。安田さんは平和祈念式典の取材などのために来崎。忙しいスケジュールの合間を縫って、2時間以上にわたって学生たちの質問に応じてくれた。

お二人への質問は多岐にわたった。中満さんへの問いのひとつが、「壁にぶつかった時、どのように克服されてきたのですか」というものだった。記憶の限りではあるが、中満さんは「大きなもの小さなものを合わせると、壁は毎日のように直面する」と

前置きした後で、こう語った。第一に大事なものは、意見の異なる相手の話をよく聞くこと。次に大事なものは、達成したい目的に向けて強い意志を持ち続けること、だった。

安田さんは主、に紛争地や紛争を経験した街での取材経験語ってくれた。戦禍をくぐり抜けたイラクには、ヒロシマ通りがあることを写真も交えて紹介してくれた。イラクの街と長崎の交流が進んで、「ナガサキ通りもできるといいですね」と期待を寄せていた。長年にわたって国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の一員として危険地域などで難民問題に対応してきた中満さんは、安田さんにとってあこがれの存在だったそうで、お二人の間でも会話が弾んでいた。

ナガサキ・ユース代表団を経験した学生には何らかの形で「平和」への取り組みに関わってってもらいたいが、中満さん、安田さんという傑出したロールモデル(模範となる人物)と過ごせたあの日の午後は、なんと貴重で贅沢な時間であったことだろうか。

(よしだ ふみひこ、RECNAセンター長・教授)



中満軍縮担当国連高等代表と懇談するナガサキ・ユース代表団メンバー（撮影:RECNA）



ジャーナリストの安田さんと懇談するナガサキ・ユース代表団メンバー（撮影:RECNA）



私たちはナガサキ・ユース代表団9期生として有吉亜樹人・大園穂乃佳・川尻ゆい・鈴木直緒・中村楓・藤田裕佳・宮本光・村上文音・山口稔由の9名で約9ヶ月間活動しました。

残念なことにコロナウイルス感染の拡大のために昨年同様、予定していた活動を大幅に制限、変更しなければならず、海外への渡航だけでなく、国内での活動も思うようにできない部分もありました。しかし、それを逆手にとってインターネットでの活動を充実させたり、全国からデータを集めて調査を行うなど、様々な工夫を凝らして活動を展開しました。また、これまでのナガサキ・ユース代表団の活動の積み重ねを元にBasel Peace Officeの主催するPeace and Climate action of European Youth (PACEY) Awardのヨーロッパ外／グローバル部門に参加し、惜しくも受賞はなりませんでした。最終選考の3グループの一つに残るなど、国際的にも有意義な発信を行うことができました。

勉強会では、複雑に絡み合う核兵器情勢に一歩足を踏み入れた気持ちになりました。明確な答えが存在しない、だからこそ学ぶべき視点が多様に広がっていることを知ったと同時に

に、生涯にわたって学び続ける必要があることを痛感いたしました。学べば学ぶほど分らなくなる核兵器問題。根拠ある自分の意見を確立させるために、引き続き学び行動し続けたいと思いました。

また、長崎・広島研修では、当時私たちと同じ人間の暮らしがそこにはあったということを実爆資料館・平和記念資料館・平和公園・被爆した小学校などを訪れることで再確認しました。当時の人々の写真や証言を残すために活動されている新聞記者の方のお話をお聞きし、愛する人・大切な人がいたそれぞれの人生・命について知り、考え、それらの情報を発信することの大切さを改めて実感しました。

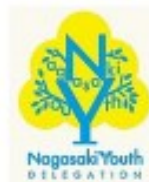
更に私たちは重ねてきた勉強会や研修の経験をもとに、主に小中高校の生徒の皆さんに、出前講座も行いました。講座では私たちが一方的に話すだけではなく、生徒の皆さんのアウトプットの時間も大切にすることを意識しました。これまで行われてきた、過去について学ぶ平和教育はもちろんのこと、そこから発展させて、もっと未来に向けて一人ひとりが主体となって考えてもらう、良い機会をつくることができました。

## PACEY Plus Awards 2021

The Nagasaki Youth Delegation is a human resources fostering program targeting youth aged between 18 to 25 residing, studying or working within the Nagasaki prefecture. Its activities are designed to equip young people in Nagasaki who will lead the next generation with an ability to think and act on their own, through learning in a practical manner about nuclear disarmament and peace issues.

### NAGASAKI YOUTH DELEGATION

NAGASAKI YOUTH DELEGATION (JAPAN)



PACEY Award でオンラインプレゼンテーションを行うナガサキ・ユース代表団9期生  
(Basel Peace Office ホームページより)

小学校の時に受けた平和教育について全国の18歳から25歳に意識調査を行い、平和教育の頻度と題材に地域差があることが分かりました。詳しくはHPに紹介している調査レポートに書きました。被爆者がご存命ではなくなった後の世界で、今後戦争体験者からのお話を直接お聞きできない世代が生まれてきます。その子どもたちに戦争の歴史を伝えるためにはどうしたらいいのか、考えていかなければならないと改めて感じました。

私たちはオンラインイベントの主催と開催の両方を行うことで多くの学びを得ることができました。特に6月に開催した「核兵器は毀滅、思いは不滅」のイベントでは同世代の若者だけでは

なく、幅広い年代・国籍の方とワークショップを通じて意見交換をすることができました。

活動を通じて感じたことは、人とのつながりの大切さです。私たち一人ひとりの力は小さいかもしれませんが、「微力だけど無力じゃない」という言葉があるように、たとえ小さな力だったとしても、同じ想いを持っている仲間と繋がっていけば、いずれは大きな影響力を持つものになるということを感じました。

\* ナガサキ・ユース代表団9期生の活動については [こちら](#)

(ながさき ゆーす だいひょうだん だい9きせい)

## 書評：黒澤満著 『核不拡散条約50年と核軍縮の進展』 (信山社、2021年)

阿部 信泰

黒澤満教授は1945年の生まれで核不拡散条約(NPT)ができた1968年～70年当時は大学から大学院の時代で正にその頃から教授退官までの50年間、研究・教授人生とともに歩んできた条約と言ってもよい。本書はその集大成とも言うべき著書で、条約の各条項に関する議論・問題点を分析し、条約に関連する戦略核兵器制限諸条約から最近の核兵器禁止条約に至る問題も取り上げている。NPTが核軍縮・核不拡散の礎石と言われるだけにこの条約を多面的に分析することによって20世紀から21世紀にわたる核軍縮・核不拡散問題を概観する適書と言える。著者は、5年毎に開かれるNPT再検討会議にも出席してきたので、会議の現場で直接見聞した議論を基にした著作となっていて、議論の焦点がどこにあるかの確に把握している。

核兵器を保有していない国の立場からするとNPTの最大の焦点は著者が冒頭に取り上げたNPT第6条に規定された核兵器保有国の核軍縮義務で、核兵器保有国は、条約は文字通り「核軍備競争の早期の停止および核軍縮に関する効果的な措置について、誠実に交渉を行う」ことを義務付けているに過ぎないと主張し、非核兵器保有国側は、当然、誠実に進められた交渉は核軍縮という実質的成果を生まなければならないと主張する。

ところが1996年の包括的核実験禁止条約採択以来、多数国間核軍縮の動きは停滞し、米露間でも2010年に新START条約ができて以降、核軍縮の動きは停滞しほとんど進展が見られない状態に陥った。こうした状況に業を煮やした非核兵器国の不満と2010年のNPT再検討会議でスイス代表が提唱した核兵器使用がもたらす人道上の惨禍に焦点を当てるアプローチを背景として核兵器禁止条約策定の動きが始まり、2017年の条約案採択となった。この辺の事情も著者は的確に指摘している。条約は2021年1月に発効したが、核兵器保有国は1国も入っていないので、著者が言うようにいまだ核兵器を1つも削減するものではないが、条約の目的とする核兵器に悪の烙印を押し、非正当化し、核廃絶を推進するという目的に一歩近づいたと言える。しかし、まだ道のりは遠く、著者が最後に指摘するように核兵器禁止条約の支持国および支持するNGOは、これからも一層の活動を推進して目的達成に努めることが不可欠である。核軍縮に向けて現実可能な個々の措置を徐々に実施しようとする伝統的なアプローチと核兵器禁止条約支持国の間の対立の緩和をどのように進展させるかがこれからの重要な課題であり、日本政府が提唱する両陣営間の橋渡しの目指すところでもある。核軍縮達成までの課題は多く残り、著者の引き続き活躍に期待したい。

(あべ のぶやす、元軍縮担当国連事務次長)

本書は、核軍備管理・核軍縮分野で言われるところの透明性、すなわち「核の透明性」とは何かについて1980年代後半から現在に至るまでの議論の変化を検証しつつ、米ソ、米露の二国間核軍備管理・核軍縮において多少なりとも成果を見せた透明性措置の目的や意義を明らかにした上で、米ソ、米露間で可能であった透明性措置が、米中露間では何故うまくいっていないのか、また、米ソ、米露間の透明性措置を参考に、中国に対してはどのような透明性措置が適用できるのかについて、一次資料を用いつつ著者の外交官としての経験に基づく独自の視点から丁寧な考察を行なっている。

著者も問題意識の中心として捉えているとおり、核の透明性という概念には定まった定義はない。本書はまずこの「核の透明性」の概念について細かく整理、明確化することから作業を始めている。透明性に限らず、体制的にも歴史・文化的にも異なる国同士が議論や交渉を行うに際しては、用いる用語や概念についてまず共通の認識を持つことが重要である。オバマ政権下において米国主導で進められた5核兵器国による対話プロセスが、核軍備管理・軍縮に関する用語集作りにまず着手したことは、用語についての共通概念を持つことの重要性を示唆する一例といえよう。透明性については、本書でも詳述されているとおり、NPT締約国の西側諸国の間でさえも必ずしも

認識が一致しているわけではない。本書はまず、曖昧な共通認識のまま議論が進められてきた「核の透明性」について、その意味するところの整理を行うことで、議論の共通の土台を提供しているといえる。その上で、米ソ間、米露間で透明性措置をとる必要性を生じさせた危機的安定性という概念自体が、第一（先制）使用を明確に否定する中国の核戦略からすると受け入れ難い概念とみなされる点を指摘している。危機的安定性という概念が、核兵器の第一使用の可能性を前提としているからである。すなわち、中国の核戦略を考えた時に、米ソ・米露における戦略的安定性の確保という目的に基づいた透明性措置自体、中国にとって極めて受け入れがたいものとなってしまう点を指摘しているのである。戦略的安定性の確保を基礎とする米ソ・米露と、戦略的安定性の概念に否定的な中国の間には、前提条件自体に大きな乖離があるわけであるが、本書は、そうした相違点を明らかにしつつ、米中露に共通すると考えられる透明性の目的、意義、対象、原則の分類を試みている。さらにその上で、中国の核戦略にも配慮した透明性確保の方策、すなわち「中国自身の核抑止レベルに相応したレベルでの透明性」という提案も行なっており、核軍縮を研究する者にとっては必読の書といえよう。

（ひかわ かずこ、大阪女学院大学教授）



- 4月28日(水) 「被爆の実相の伝承」のオンライン化・デジタル化事業の受託について記者会見: 吉田センター長、中村准教授(オンライン)
- 5月13日(木) (公財)広島平和文化センターとRECNAとの覚書締結式: 吉田センター長、中村准教授(オンライン)
- 5月14日(金) International Joint Seminar: Assessing North-east Asia Nuclear Domino: North Korean Nuclear Threat and South Korean Response 鈴木副センター長(オンライン)
- 5月21日(金) 公開シンポジウム「パンデミックと核兵器: 人類共通の脅威にどう対処すべきか」: 吉田センター長、鈴木副センター長(オンライン)
- 5月25日(火) 核兵器廃絶長崎連絡協議会総会 場所: RECNA1階会議室
- 6月11日(金) 2021年度版「核弾頭・核物質ポスター」完成記者会見: 吉田センター長、鈴木副センター長、中村准教授 場所: RECNA1階会議室
- 6月12日(土) 2021年度核兵器廃絶市民講座 第1回 「第三の核時代 持続可能な平和への方向転換」講師: 毛利勝彦国際基督教大学教授、吉田センター長 場所: 長崎原爆資料館ホール
- 6月19日(土) ナガサキ・ユース代表団第9期生オンライン・イベント 「核兵器は毀滅、想いは不滅 ～過去を知り、現在を生き、未来に希望を持つ～」ナガサキ・ユース代表団第9期生 (オンライン)
- 6月20日(日) 日本国際連合学会 第22回研究大会「持続可能な開発目標(SDGS)の現在」 「軍縮・核廃絶・安全保障への長崎の視点ーBottom Up型、Leave No One Behind型アプローチ」セッション 講師: 吉田センター長 座長: 広瀬副センター長 コメントーター: 田上長崎市長 (オンライン)
- 6月24日(木) ボスニア・ヘルツェゴビナの大学との共同セミナー: 吉田センター長 (オンライン)
- 6月27日(日) 「平和と核軍縮」(J-PAND)第4巻1号刊行
- 7月 1日(木) 林田光弘特任研究員採用記者会見 吉田センター長、林田特任研究員 場所: RECNA1階会議室
- 7月 2日(金) 国際共同セミナー「北東アジアにおける核のドミノの評価: 北朝鮮の核の脅威と日本の対応」鈴木副センター長、広瀬副センター長、中村准教授 (オンライン)
- 7月 8日(木) 長崎県立長崎東高校平和学習 講師: 広瀬副センター長 (オンライン)
- 7月20日(火) 「北東アジアにおける核使用可能性とその評価」プロジェクト 諮問ワークショップ 吉田センター長、鈴木副センター長、広瀬副センター長、中村准教授 (オンライン)
- 7月27日(火) スレイマニ工科大学(イラク)の長崎大学との共同シンポジウム: 山口客員研究員 (オンライン)
- 7月28日(水) 「被爆の実相の伝承」のオンライン化・デジタル化事業実施に伴う被爆前の長崎写真収集についての記者会見: 吉田センター長、中村准教授、林田特任研究員 場所: 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 交流ラウンジ
- 7月29日(木) 「平和と核軍縮」(J-PAND)4巻1号「核兵器禁止条約特集」についての記者会見: 吉田センター長、広瀬副センター長、山口編集長補佐 場所: RECNA1階会議室
- 8月 3日(火) 「北東アジアにおける核使用可能性とその評価」プロジェクト記者会見: 吉田センター長、鈴木副センター長 場所: RECNA1階会議室
- 8月 8日(日) 連合平和ナガサキ集会 「核兵器禁止条約発効後の核兵器をめぐる国際情勢」講師: 鈴木副センター長 場所: 県立総合体育館サブアリーナ
- 8月 8日(日) 中満泉軍縮担当国連高等代表およびジャーナリスト安田菜津紀氏とナガサキ・ユース代表団の懇談会 ナガサキ・ユース代表団第9期生 場所: RECNA1階会議室
- 8月 9日(月) 長崎県立北松西高校平和学習 講師: 中村准教授 (オンライン)
- 8月22日(日) ナガサキ・ユース代表団第9期生活動報告会 場所: 長崎大学文教スカイホール
- 8月26日(木) 平和首長会議 「世界の青少年による平和交流活動大会」中村准教授 ナガサキ・ユース代表団第9期生 (オンライン)
- 9月18日(土) 2021年度核兵器廃絶市民講座 第2回「談論風発: 市民・平和運動の150年」講師: 目加田説子中央大学教授、橋場紀子長崎大学大学院生博士課程 場所: 長崎原爆資料館ホール
- 9月29日(水) ナガサキ・ユース代表団第10期生募集記者会見: 調核兵器廃絶長崎連絡協議会会長、広瀬副センター長 場所: RECNA1階会議室

# お知らせ

## 世界の核弾頭データ および 世界の核物質データ

2021年度版「世界の核弾頭データポスター」および「解説しおり」、2021年度版「世界の核物質データポスター」および「解説しおり」が完成しました。下記より自由にダウンロードいただけます。

「世界の核弾頭データポスター」および「解説しおり」は [こちら](#)  
「世界の核物質データポスター」および「解説しおり」は [こちら](#)

また、印刷したものをご希望の場合は、下記ホームページの核兵器廃絶長崎連絡協議会までお問い合わせください。

## ホームページのリニューアル

核兵器廃絶長崎連絡協議会およびナガサキ・ユース代表団のホームページが内容を充実し、さらに見やすくリニューアルされました。ぜひ一度ご覧ください。

「核兵器廃絶長崎連絡協議会ホームページ」は [こちら](#)  
「ナガサキ・ユース代表団ホームページ」は [こちら](#)

## ナガサキ・ユース代表団 第10期生 募集開始

下記の要領でナガサキ・ユース代表団第10期生の募集説明会を開催いたします。

10月14日(木)18:30~20:00 長崎大学核兵器廃絶研究センター1階会議室(オンライン参加あり)

10月15日(金)18:30~20:00 長崎県立大学シーボルト校本部棟2階特別会議室

10月16日(土)10:30~12:00 長崎大学核兵器廃絶研究センター1階会議室(オンライン参加あり)

なお、応募受付期間は10月18日(月)~11月1日(月)で、応募様式は [こちら](#) からダウンロードできます。

## 2021年度 核兵器廃絶市民講座

### 第3回 「パンデミックと核軍縮 人類の未来を考える」

講師：鈴木 達治郎 RECNA副センター長

門司 和彦 長崎大学教授

森 元齋 長崎大学准教授

日時：2021年11月13日(土)13:30~15:00

会場：大村市ミライオン 図書館 (オンライン配信あり)

### 第4回 「これからの軍縮教育 日韓の視点から」

講師：李 起豪 韓信大学教授・平和と公共性センター長

中村 桂子 RECNA准教授

日時：2021年12月18日(土)13:30~15:00

会場：長崎原爆資料館ホール (オンライン配信あり)

### 第5回 「核兵器禁止条約の今後」

講師：広瀬 訓 副センター長

河合 公明 核兵器廃絶日本NGO連絡会

事務局

日時：2022年2月5日(土)13:30~15:00

会場：長崎原爆資料館ホール(オンライン配信あり)

※ いずれも、受講料無料、オンライン配信については、事前申し込みが必要です。会場での参加につきましては、事前申し込みは不要ですが、コロナの感染状況によっては、開催場所や開催方法等に変更が生じる場合がありますので、必ず事前に [こちら](#) でご確認ください。

※ いずれも、お問い合わせは、核兵器廃絶長崎連絡協議会 (Tel: 095-819-2252 Fax: 095-819-2165)まで、お願いします。



RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

第10巻1号 2021年9月30日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター

〒852-8521 長崎市文教町1-14

Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165

E-mail: recna\_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp

http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

©2021 長崎大学核兵器廃絶研究センター